

Jazz Interview Vol.3

“戦慄のブロー” ジャズの未来を継ぐ男 Joshua Redman

2年8ヵ月ぶり、2度目のブルーノート東京でのライブ2日目のステージを数時間後に控え、ラフな出で立ちでくつろぐジョシュア。あの衝撃のデビューから注目してきたサクソ奏者であり、今まさに最高潮のジャズマンの一人だ。会話の節々に覗かせる音楽に対する真摯な態度。語る言葉自体が音楽で、聞きしに勝るナイスガイ！ インタビュー後のライブもぶっ飛びました！！ やっぱ凄いこの男…。(2005年9月9日キャピトル東急にて) 取材 & 文：加瀬正之



——昨晚の初日のステージの手応えはどうでしたか？

日本でプレイするのは大好きだし、ブルーノート東京も大好きなんだ。観客の反応も凄く良かったし、このバンドでプレイできることが本当に楽しいよ！ 今回は新作『モメンタム』は勿論、前作『エラスティック』からの曲もプレイすると思うけれど、アルバムに収録できなかった曲もたくさんあるから、そういうナンバーも含めて、新しいサウンドを聴かせられると思うよ。

——今回のツアーには、マイク・モレノ (g) が参加していますね。

『モメンタム』にもギタリストが参加しているから、トリオ + ギターという形は、ごく自然な流れなんだ。少し前のツアーまでは、ジェフ・パーカーがギターで参加していたんだ。マイクは才能もあるし、新しい曲にも直ぐに対応できて、ソロも素晴らしいプレイヤーだね。また、ギターを入れたもう一つの理由としては、トリオでは演奏中あまりにも忙しいんだ。僕もサクソを吹いたり、キーボードに回ったり。サム (ヤエル/key) も忙しいからね。だからギターを入れることで、バンドの演奏に余裕が生まれるんだ。

——新作『モメンタム』はノンサッチ移籍第一弾で、10作目のオリジナル・アルバムとなりますが、何か特別な思い入れはありましたか？

実は『モメンタム』も『SF JAZZ コレクティヴ』もレコーディング自体は、ノンサッチに移籍する前にほとんど終わっていたんだ。10作目のオリジナル・アルバムだった？ そうなの？ それは知らなかったな (笑)。

——『ya ya3』『エラスティック』から『モメンタム』まで、サム・ヤエル (key) とブライアン・ブレイド (ds) という不動のメンバーが続いていますね。

2002年からはジェフ・バラードがメイン・ドラマーとして参加しているから、今回ブライアンは、ゲストという立場で参加してくれているんだ。サムは本当にパーフェクトなパートナーで、人間的にも素晴らしいし、音楽的なテクニク・知識も申し分ない。彼はジャズだけじゃなくて、ファンクやソウルにも精通しているし、いろんなジャンルの音楽を気持ち良く一緒にプレイできる仲間だね。彼はキーボードでありながら、左手で同時にベース・ラインも弾くといったベーシストとしての役割も果たしてくれている。

The Walker 14

でも、何よりも彼が素晴らしいのは、瞬間瞬間の決め所でのプレイの素晴らしさだけでなく、音楽・サウンド・作品の全体像、すべての展開を見ることができる能力・センスがズバ抜けている所だね。テクニク的に素晴らしいミュージシャンはたくさんいるけど、サムのように全体像を把握できるミュージシャンは本当に少ないんだよ。彼のようなミュージシャンと一緒にプレイできることは、本当にラッキーだと思っている。

——今回もレッド・ツェッペリンの「ザ・グランジ」をカヴァーしていますね。毎回あなたが取り上げるカヴァー曲もとても興味深いのですが、その選曲基準について聞かせてもらえますか？

僕自身ジャズ以外にもたくさんのジャンルの音楽を聴いているから、曲自体は勿論知っているんだけど、「ザ・グランジ」にしてもスタジオに入ってから決めたものなんだ。一番基準になるのは、現時点で一緒に演奏しているバンド、ミュージシャンで、どの曲を演奏すると一番新鮮な感覚で素晴らしい演奏・発見ができるかということ、その曲を取り上げることで、自分達がいかにクリエイティブになれるかということだね。

——2003年の「東京JAZZ」のステージでもそうでしたが、最近のステージでは、足元がたくさんエフェクターのフットペダルが置かれていますか、エフェクターに関するアイデアや知識は、ロックやギタリストから学んだのですか？

以前ほどズラッとたくさん並べることはなくなったんだけどね (笑)。特に、ロックや他のミュージシャンから影響を受けたということはないんだ。ずっとアコースティックなジャズをプレイして来て、それも勿論楽しかったけれど、同時にエレクトリックな音楽も楽しんでたから、現在のバンドのようなサウンドを出す上で、実験的な試みを重ねながらモノにできたんだ。

——あなたの音楽には強いスピリチュアルなパワーを感じるのですが、音楽を創造する上で何か特別なもの、ヨガやボクシング、他の創作活動などをやったりはしていますか？

僕の場合は、音楽をやるのが全てで、常にハート & ソウルで音楽を作っているから、特別なことはしてないよ。体を鍛えるために走ったりするけど、それはスピリチュアルなことではなく、フィジカルなことだしね (笑)。色々学んでみたいとは思うけど、音楽をやること自体に、soul, emotion, passionを感じるんだ。

——あなたの名前“Redman”にも関わりますが、これまでのアルバム・ジャケットやイメージ的に、赤やオレンジといった色がポイントとして目立つような気がしますが、特に「赤」という色にパワーを感じているのですか？

いや、それは今まで気付かなかったなあ(笑)。新作の『モメンタム』の赤いロゴは、僕が選んだんだけど、それ以外は僕のアイディアではないんだよ。「赤」が良く使われているのは、多分最初に誰かが僕に赤いイメージを描いて、それが定着しているのかもしれないね。僕自身には「赤」という色に特別なこだわりはないんだけどね(笑)。

——あなたが初めて買ったジャズのレコードは、ソニー・ロリンズのアルバム『サキソフォン・コロソサス』だと聞きましたが、今年の11月の日本公演で、ライヴ・ツアーからの正式引退を表明したソニー・ロリンズについて何か思うところはありますか？

ええ、引退しちゃうの？ それ本当？ 嘘だろ？ 最初に買ったレコードは確かに『サキソフォン・コロソサス』だよ。でもソニー・ロリンズの引退の話は初耳だな。僕にとっては、一番影響を受けたサクソ奏者だし、プレイそのものもそうだけどインプロビゼーション(即興)の部分でとても強い影響を受けたんだ。今、引退の話聞いて驚いているけど、もしそれが事実なら寂しいことだし、とても残念なことだ…。でも「今までお世話になりました」っていう感謝の気持ちも強いね。彼は本当に素晴らしいミュージシャンだし、真のジャイアンツだからね。

——特別な才能のあるあなただからあえて聞きたいのですが、これまでのミュージシャン人生の中で、演奏するのが嫌になったり、作品を創造することが辛くなったりはありましたか？

それは毎晩感じていることだよ(笑)。自分に厳しい方なのかな？ でも、それでも音楽をやり続けなくちゃいけないと思うし、今まで素晴らしいミュージシャン達と演奏する機会に恵まれたお陰で、今の自分があるわけだからね。

——あなたのようなサクソ奏者になることに憧れている若いミュージシャン達に一言頂けますか？

できるだけいろいろなジャンルの音楽をより深く、注意深く聴いて、プレイヤーとして、他の人のプレイだけでなく自分自身の演奏にも注意深く耳を傾けることが大切だね。客観的に自分の演奏のどうい所が弱いのか、どうい所が素晴らしいのかを分析して、自分自身の音を見つけていくこと。それと、たくさんの素晴らしいミュージシャン達と共演できるチャンスを得ることも大切だね。でも、結局はやっぱり自分を信じること。他人の物まねではなく、自分自身の音を早く見つけて欲しいね。

——最後に、『モメンタム』がリリースされてまだ間もないですが、次回作のプランや、新たなアイデアなどはありますか？

次になにが起こるかは、今の時点では全く予想がつかない。“エラスティック・バンド”の他にも、“SF JAZZ コレクティヴ”でもやらなければいけないことがたくさんあるし、アコースティックのトリオでも活動しているからね。アイデアはあるんだけど、これから具体的にどうするかはまだ全くわからないよ。でも、これからも新しいサウンド、素晴らしい音楽を追求していきたいね。



写真撮影：山路ゆか

“ジョシュア・レッドマン・エラスティック・バンド” ブルーノート東京 LIVE (2005年9月9日)

2日目の1stステージ。サム・ヤエル(key)、マイク・モレノ(g)、ジェフ・バラード(ds)を従え、颯爽と登場したジョシュア。客席も満席状態で、現在ジャズ・シーンで最高にかっこいいバンド“ジョシュア・レッドマン・エラスティック・バンド”の人氣の凄さを物語る一夜だった。

サム・ヤエルとジェフ・バラードのトリオによる“エラスティック・バンド”として出演した「東京 Jazz 2003」の2日目のオープニングでも演奏され、新作『モメンタム』に収録されたサムのオリジナル「シャット・ユア・マウス」で幕を開けた。

伝統的なジャズとは全く異なるその新しいサウンドとバンドの迫力に、客席も圧倒され気味だったが、徐々にジョシュアのジャズに飲み込まれ、魅せられていく聴衆たち…。続く、前作『エラスティック』からのジョシュア作曲のバラード「ロング・ウェイ・ホーム」。ジョシュアが奏でるソプラノの音色が素晴らしい。

デビュー当時から、ジョシュアの才能は素晴らしいメンバーを集めることにもあったが、サム・ヤエルとジェフ・バラードは本当に凄い！『フリーダム・イン・ザ・グルーヴ』からのナンバー「ストリーム・オブ・コンジャネス」で魅せた2人のソロには体が震えた。『ya ya 3』からの「トゥー・リメンバー、ワン・フォゲッツ」、『エラスティック』からの「ブギラスティック」と怒涛のプレイで客席を痺れさせ、マイク・モレノのギターもいぶし銀の存在感を放っていた。

気が抜ける瞬間というのがなく、最終ステージに釘付けにされたこんな凄いライブは、久しく体験していなかった。テナーからソプラノ、エフェクターを存分に駆使したサウンドに時代の最先端を行く独特のグルーヴ感、生のライブならではの興奮度！

アンコールは、『モメンタム』にも収録のオーネット・コールマンの「ロニー・ウーマン」。計算され尽くしたエフェクト効果と、ツボを押さえ切ったステージングに終始狂巻！

所謂、“天才”という人間を目の当たりにした一日だった。

今年6月に同時リリースされたジョシュアの強力盤！



Momentum SF Jazz Collective
Joshua Redman Elastic Band feat. Joshua Redman
ワーナーミュージック・ジャパン：ワーナーミュージック・ジャパン：
WPCR-12031 ¥2,625 (tax in) WPCR-12108 ¥2,680 (tax in)